

上杉家乗っ取りの大悪人

そのため上杉家四代藩主綱勝を毒殺

パワハラどころではない。罪のない人間も己の野望の為、毒殺する極悪人が吉良上野介である。

大河原文書奥付

右書面は、大河原家四世之孫忠左衛門重喬大熊彌一右衛門江戸勤番之砌、親類連名にて差越したる事實譚なり、吉良家は遠く新田家より出で、徳川氏と同家たるの故を以て列高家衆、數世の孫上野介義央は上杉播磨守綱勝公の妹婿なり、寛文四年閏五月七日、上野介が遠謀に依て綱勝公を毒殺し奉りたり、于時御年二十有七、上野介嫡子三郎君を綱勝公末期の養子と、吉良家に於て申立、而して上杉家を嗣がしむ、後ち弾正大弼綱憲と號せらる、綱憲公御二男を上野介が嗣子たらしめ、左兵衛義周と稱せらる、綱憲公御治世中、吉良家に於て上杉家より、莫大の金銀財寶借用消費為したりと言ふ、(以下省略)

以上は、討入り当夜、死人の山となっていた本所吉良邸の後片付けに派遣された、上杉家家臣、大熊弥一右衛門の書状の奥付である。四十七士に荒らされた吉良邸の惨状を国許米沢の義父大河原忠左衛門に宛てた書状の一部である。この書状には、はっきり上野介が遠謀により綱勝を毒殺したと示してある。しかも、敵対する浅野家方の古文書ではなく、上野介の長男が当主の上杉家家臣が執筆したものである。この事実は大きいと思うが、上野介を善人として「名君呼ばわり」する方々、さあこの事実をどう弁解するか。旧吉良町の方々、学芸員の方々、是非とも反論していただきたい。史実という分野は、このような古文書（一級史料）が証明となるように大学院で学んで、学芸員に従事しているのではないのか。上杉家では、一人の家臣ではなく、藩内では、歴代周知の事実（毒殺）として誰も口を出せなかったようである。

因みに、大河原家の当主（重賢氏）は、先年まで中央義士会の理事でもあり、小生（中島）も、以上の「大河原文書」は確認している（全文写真で保管）。

尚、中央義士会では、上野介の悪行を証明する古文書は、小生の生存中発表仕切れないほど持っていることもご報告しておく。どうして「遠謀殺人者」が「名君」になるのか。（米沢市長しっかりして下さいよ）

一刻も早く上野介が「名君」である証拠を示すのが、学芸員の仕事である。

（文責 中島）

NPO 法人

忠臣蔵倶楽部会報

発行人

〒135-0047

東京都江東区富岡 1-17-1-403

忠臣蔵倶楽部

TEL&FAX 03-3630-1927

編集者 中島康夫

ホームページ

忠臣蔵会館

出版・校正・協力

テレビ製作協力

講演・史跡案内

<http://www.chuushingura.net/>

「元禄赤穂事件の記録」

定価 2200 円

(消費税込)

送料 350 円

048-973-3777

郵便局の払込票をご利用下さい

中央義士会

00130-0-54568

岩屋寺の歴史的価値と年表

I 歴史的価値

岩津 聖史

(1) ポイント：（岩屋寺年表参照）

- ① 岩屋寺は、ながらく、平安期創建の西岩屋大明神の、神宮寺であった。
- ② 本尊の大聖不動明王は、三井寺中興の祖、智証大師円珍の作と伝わる、智証大師ゆかりの仏像である。
- ③ 岩屋寺の現在の境内に、大石内蔵助の邸宅がかつて有り、その位置に遺髪塚が作られ、1775年、遺髪塚の上に「大石内蔵助旧跡碑」が建てられた。この石碑の建つ場所は現在、「遺髪塚」と呼ばれている。又、本堂、毘沙門堂、及び庫裡の屋根瓦に、大石家の家紋、右二つ巴を逆にした、左二つ巴が見られ、その他、大石内蔵助の位牌の扉、木像などにも逆家紋が見られる。これらより、当寺は「大石寺」と呼ばれ、現在も全国から熱烈な忠臣蔵ファンの参詣が絶えない。

(2) 歴史的価値の考察

前記一の①②③の順に考察を行う。尚、考察に当たっては、対象物そのもの、古文書、及び道標・石碑等の意味を分析する他に、寺伝、口伝も重要視している。なぜなら、「当時の人々が、どう思っていたか、どう信じていたか」を否定しては、歴史学は成り立たないからである。（日文研の笠谷和比古名誉教授も、「歴史学者は産婦人科的考察をしてはならない。あくまで当時の人々がどう認識していたかを重要視すべき。」と2012年9月14日に講演されている。）

- ① 神宮寺を証明する最古の古文書は、1671年9月22日の「比留田家文書」で、西岩屋大明神の「宮寺」とある。又、1767年2月28日の、「岩屋大明神御修理所之事」には、神社の末尾に「護摩堂」「寺」「小屋」が列挙されている。さらに、寺伝「岩屋寺と大石良雄」や「宇治郡寺院明細帳」等には、平安期より宮寺であったと記されており、現在迄語り継がれている。尚、西岩屋大明神の創建についての記録は多々有るが、「延喜式」（927年）に「山科神社二座」、及び「山科郷古図」（12世紀鎌倉期）に「西岩屋殿」と記されており、存在を確認する資料として信ぴょう性が高い。
- ② 智証大師ゆかりの不動明王を証明する最古の古文書は、1878年の「山城国宇治郡西野山村誌」で、「近来村家の旧記中に発見する録に曰く（中略）本尊の由来を古来智証大師の造とも伝う」と記されている。又、1922年の「京都府宇治郡誌」及び1930年の「京都府山科町誌」にも、「本尊不動明王は智証大師の作」と記されている。更に、1951年の「大石良雄250年祭記念法会開催趣意書」には、「智証大師の御作にして三井寺御本尊如意輪観世音と同木同作なり」と記されている。そこで、三井寺に問い合わせた。
三井寺のHPには「如意輪観音像は智証大師自らが彫刻された」とあるが、三井寺観音堂からの回答は、「如意輪観音像の制作年は10世紀とされています。随って智証大師の御作ではありません。岩屋寺の不動明王は、智証大師と縁のあるものだと思いますが、大師自身の作かは分かりません。昔はお寺様自体が天台宗寺門派（三井寺派）だったと思います。」とのこと。そこで、「同木同作」に固執することなく、不動明王単体の制作年を考察する事とする。周知の通り、智証大師円珍は修行中に影現した金色不動明王を、画工空光に写させ、国宝「黄不動尊画像」を後世に残し、曼殊院ほか、多くの模写像が生まれている。円珍が不動信仰を盛行させた最初の人と言われるゆえんである。次に、三井寺の重要文化財には「不動明王坐像」（9世紀～10世紀初頭）という、正に智証大師円珍の時代の仏像も現存している。さらに、右牙が上向き、左牙が下向きといった10世紀以降の特徴が無い。この3点より、智証大師円珍ゆかりの、ないしは、9世紀制作の不動明王立像が現存する可能性は十分有り得る。又、年表の、山科西野山村大字百々小宇不動坊から不動明王立像が進藤仙介によって現在の岩屋寺へ移された経緯は、前出の「西野山村誌」に記されており、信ぴょう性が高い。
- ③ 大石内蔵助旧宅の所在地は、実は定かではなく、現在の大石神社の位置、ないしは極楽寺、福王寺辺りという説も有る。しかし幸いな事に、元禄の時代を超越した絶大なる人気、膨大な史料を保存せしめたばかりか、未だ新史料が発掘されている。これらが岩屋寺境内説を不動のものとしている。

第一に、1775年、遺髪塚に建てられた円柱形の「大石内蔵助旧跡碑」が、1787年、「拾遺都名所図会」を皮切りに図会の中に紹介された。

第二に、大石が書状で事後処理を頼んだ石清水八幡の大西坊証讚法印と親交の有った岩屋寺盛仁住職は、大石の遺した什器類を遺産分割され、それらは岩屋寺に現存している。

第三に、1827年より無数の道標が山科に建ち、中でも1843年の道標「本尊大聖不動明王岩屋寺右上 大石旧地 義士四十七人」は、岩屋寺への旧道入口に建てられており、岩屋寺に大石旧宅があった事を如実に示している。現在の本堂が建つ11年前のことである。

(3) さいごに 岩屋寺の魅力は、歴史的価値以外にも自然の、特に早咲きの枝垂桜や紅葉の圧倒的な美しさを抜きには語れない。又、大須賀珠心住職の、一貫して大石の人間愛の大きさを仏教者として説く姿勢は、感銘を誘う。

II 歴史年表

(平安時代)

859・貞観元年 智証大師円珍、三井寺の長吏となる。同木にて如意輪観音坐像（現三井寺観音堂本尊）及び不動明王立像（現岩屋寺本尊）を造る。

897・寛平9年 9月9日、西野山に西岩屋大明神が創建され、その後、境内に岩屋寺の前身である宮寺も建立され、神宮寺として祭神の行事を行っていた。

(鎌倉時代)

1229～1232・寛喜年中 密宗の僧が道場とした。この寺は真言宗勸修寺末寺の「大岩寺」とも伝わるが、確たる記録無し。

年代不詳 比叡三千坊の内の1寺院が、西野山村大字百々小字不動坊にあつて、智証大師円珍の造った不動明王を本尊としていた。

(室町時代)

1558～1570・永禄年中 既に廃寺となっていた百々不動坊の寺院の本尊不動明王その他の仏像が、西野山村の住人進藤仙介（進藤家の祖、従五位和泉守季平の第9世の孫、諱は宗次）の所有地、西野山村大字桜馬場字上之段に保存されていた。仙介は村民と議定して、これらを西岩屋大明神の境内に祀るべく、護摩堂、庫裡、及び納屋を建てる。そして、真言宗の僧、俊鉄坊が入山する。

1571・元亀2年 織田信長の兵火にかかり、寺社共に建物を焼失する。

(安土桃山時代)

年代不詳 1571年に焼失した寺社は、豊臣氏の寄進によって復興する。

(江戸時代)

1655・明暦元年 密教の僧、堂舎を再営する。

1671・寛文11年 小堀京都代官が行った寺社調査で、西野山村は当寺を「宮寺 是は真言宗無本寺。山号・院号無し」と報告。

1692・元禄5年 小堀京都代官が行った寺社調査で、西野山村は当寺を「岩屋寺」と報告、古文書で初めて岩屋寺という名称が登場する。

住職盛仁尊雄法印はこの頃、大石内蔵助の実弟、石清水八幡の大西坊専貞法印と親交があった。その縁も有って、後に内蔵助は岩屋寺直下の地に居を定めることとなる。

1701・元禄14年 大石内蔵助が西野山村の年寄 進藤五郎右衛門（山科郷土）の屋敷に入り、岩屋寺の東隣、現遺髪塚の位置一町四方の屋敷地を購入し新居を建てる。庭に牡丹の花を栽培する。内蔵助は、岩屋寺本尊不動明王を念持仏とする。

- 1702・元禄15年 うるう8月1日、内蔵助は遺物分配目録を邸内に残し、四条寺町の金蓮寺梅林庵へ移る。10月7日、討入りの為、江戸へ立つ。
- 1703・元禄15年 12月、討入り後、寺坂吉右衛門が大石内蔵助の命により芸州浅野本家へ向かう途中、25日、京の寺井玄溪の他、岩屋寺及び進藤家に立ち寄り、内蔵助からの伝言（「大石邸と遺物の始末を大西坊法印に委ねて欲しい」）及び、内蔵助の遺髪と遺物を届けた。
- 1703・元禄16年 大西坊証讚法印の指示で大石邸を改めたところ、遺物分配目録を発見する。これに基づき、宅社を進藤家、什器類は岩屋寺及び進藤家へ、残りは進藤宗家へ、それぞれ分配した。尚、什器類や遺物は、岩屋寺に現存する。
赤穂四十六士切腹の後、庄屋衆の手によって解体された大石邸の跡に、内蔵助の遺髪塚が造営され、岩屋寺盛仁尊雄法印が供養する。
- 1728・享保13年 三宮大明神の神宮寺、妙智院の僧宝蔵、岩屋寺の宗旨が真言宗であることを請け負う証文を役所に提出する。
- 1731・享保16年 浅野内匠頭旧家臣進藤源四郎、西野山に所有の屋敷地及び山林を400両で売却したのち没す。同年、岩屋寺本堂の修復が開始された。願主が進藤源四郎かどうかは記録無し。
- 1743・寛保3年 三宮大明神の神宮寺、妙智院の僧宝蔵、岩屋寺の宗旨が真言宗であることを請け負う証文を役所に提出する。
- 1767・明和4年 西岩屋大明神と共に岩屋寺護摩堂一棟、寺一棟が修理される。
- 1775・安永4年 内蔵助遺髪塚の真上に大石内蔵助旧跡碑（円柱の石碑）が建つ。建立者は宮部義正他2名。尚、この碑は遺髪塚として現存する。
- 1787・天明7年 拾遺都名所図会に「山科大石の古跡」と題し、円柱の石碑が通称「大石藪」の中に描かれ、「大石屋敷跡」と説明書きがある。又、岩屋寺の建物群は「社人」と説明書きがある。すなわち住職がおらず、神社職員が住んでいたことがわかる。
- 1791・寛政3年 無住の岩屋寺へ真言宗の僧台澄が入山する。
- 1808・文化5年 発行の「絵本忠臣蔵」に、絵図として初めて「岩屋寺」の名が表示される。又、お寺の入口は西岩屋大明神の鳥居内参道石段下にしか無く、神宮寺としての、神社との密接な関係が見て取れる。
- 1812・文化9年 西川仙随尼（岩屋寺再興一世）、当時無住であった岩屋寺（二間四方の小堂）の再興に着手し、托鉢による募財を行う。
- 1818・文政元年 仙随尼、志半ばで入寂し、堅讓尼（再興二世）がその志を継ぐ。
- 1827・文政10年 道標「左 大石良雄かくれ家」建立。
- 1843・天保14年 道標「本尊大聖不動明王岩屋寺」建立。
同じく道標「北へすぐ 大石内蔵助旧跡並西野山岩屋寺」建立。
- 1851・嘉永4年 赤穂四十七士木像を、一間三尺四方の境内仏堂に安置する。この木像は、大石内蔵助の縁者、摂津国西ノ宮の社人大石長太夫が、椰宮の林宮司に譲与し、同年、林宮司が代金5両で当寺に譲渡したもの。
- 1853・嘉永6年 岩屋寺の再興及び大石宅址の保存を西野山の有力者田中一郎が奉行所へ出願。京都西町奉行、浅野長祚（アサノナガヨシ）は自ら進んで白銀三枚を寄捨したのみならず、更に旧浅野家中の子孫に勧募を行う。尚、浅野長祚は浅野家・大石家両家の子孫である。
同年、進藤家より遺髪塚を含む「大石藪」を寄進され、境内地を整備する。
同年、赤穂義士150回忌を営む。
- 1854・嘉永7年 本堂及び庫裡が竣工。中興開山として彦根天寧寺の道鳴和尚を勧請し、曹洞宗に改宗する。
- (明治)
- 1875・明治8年 堅讓尼が入寂し、三世堅明尼が跡を継ぐ。
- 1899・明治32年 大石良雄隠棲地保存会結成。趣意書や計画図面を作成開始。
- 1901・明治34年 同保存会の改造工事完成。四十七士位牌堂を新築。
四十七士木像堂を移転改築。池の中之島に石碑「大石良雄君隠棲旧址（北垣国道京都府知事筆）を建立。

歌碑（伊勢神宮大宮司 冷泉為紀の、大石を讃えた短歌）建立。建立者は祇園一力亭杉浦治郎右衛門為久。

同年、赤穂義士追悼200年祭を執り行う。これ以降、各地よりの参拝者が著しく増加する。

- 1903・明治36年 郷土唱歌「山科」に「四十七士の木像を崇めまつりし岩屋寺」と唄われる。作詞は、元山階小学校々長、矢部文載。
- 1906・明治39年 道標「左 大石やしき」建立。
- 1907・明治40年 道標「忠肝義胆 大石良雄 やましなのかくれ家 是より十三町余り」建立。
同年、本堂前に石燈籠1基建立。寄進者は桃中軒雲右衛門。
この頃、岩屋寺の絵はがきセットを作成。遺髪塚の絵はがきに、「良雄植髪之墓所」との説明書きがあり、遺髪塚を初めて文章化する。
- 1908・明治41年 山科内外に岩屋寺及び大石旧跡の道標が6基建立。
- 1911・明治44年 山科に岩屋寺及び大石旧跡の道標が2基建立。

(大正)

- 1926・大正15年 大石道起工。大石道は従来、大石神社の鳥居を東海道線の北花山踏切から運ぶ為の新道と言われてきたが、大石神社竣工の10年前に既に着工されており、大石旧居跡が命名の由来と判明。

(昭和)

- 1927・昭和2年 大石道完成。
- 1931・昭和6年 遺髪塚の前に石碑「大石良雄遺髪之塚」が建つ。寄進者は、大阪忠信会。尚、この頃、遺髪塚が石の玉垣で囲まれ、円柱前に、花立てが2基建立される。寄進者は山田彦兵衛以下数十名。工事は増尾石材部・運輸部による。
- 1935・昭和10年 大石神社が岩屋寺の北に創建。この頃より、赤穂浪士討入りの12月14日、勸修小学校の全校生徒が朝から岩屋寺や遺髪塚に参拝するようになる。
- 1938・昭和13年 道標「大石大夫遺髪塚 岩屋寺近道」建立。
同年、道標「大石大夫関居址」を堅明尼が建立。
同年、「岩屋寺と大石良雄」（実質的寺伝）の冊子を発行。
- 1939・昭和14年 堅明尼が入寂し、四世宗明尼が跡を継ぐ。
- 1941・昭和16年 参道（市道）の拡張工事を行う。石碑「皇紀二千六百年 参道拡張記念碑」を宗明尼が建立。
- 1951・昭和26年 大石良雄250年祭を執り行う。この時、梵鐘1基を新鑄すると共に、伽藍の増改築を行う。
- 1956・昭和31年 山科義士まつりが初めて開催される。東海道本線電化完成を記念して山科商店会連合会主催の1回限りの催し。
同年、宗明尼が入寂し、五世堅英尼（賢英尼）が跡を継ぐ。
- 1974・昭和49年 山科義士まつりが山科保勝会によって毎年開催となり、義士隊列が岩屋寺へ参拝を開始する。

(平成)

- 1996・平成8年 大須賀珠心尼が入山する。
- 1998・平成10年 堅英尼が入寂し、六世堅孝尼が跡を継ぐ。
- 2009・平成21年 堅孝尼が入寂し、七世白鳳珠心尼が跡を継ぐ。

[岩津 聖史氏プロフィール]

1951年倉敷生まれ。大石良雄の母くまの出生地下津井城の城下で育つ。山科の「ふるさとの会」古文書部に所属し、山科区役所の電子メール交流サイト「山科魅力発信」に、「忠臣蔵と山科」を連載中。

その時、その義士達はどこにいたのか

(その二)

理事 三輪二郎

一、松之廊下刃傷事件後から義士たちの江戸集結まで

何の前触れもなくおきた松之廊下刃傷事件（元禄十四年三月十四日）赤穂浅野家家臣、彼等にはその日から激動の日々が始まった。

まず 伝奏屋敷からの引き揚げはその日のうちに、原物右衛門の指揮の下で行われた。調度類は伝奏屋敷の横の竜の口に船を付け、そこから水路を辿り鉄砲洲上屋敷まで運ばれた。引き揚げ終了は午後一時半ころであった。

続いて午後二時頃、国許赤穂へ凶変報せのため、早駕籠で早水藤左衛門、萱野三平の第一便が急遽発足する。これを追うように足軽飛脚の第二便が弟大学の書状を送り、さらに夜になって原惣右衛門、大石瀬左衛門の第三便が同じく早駕籠で旅立って行った。

一方内匠頭の夫人阿久利は十四日夜、髪を切り、名を寿昌院（五十七日忌後にさらに遙泉院と改名）と改名、十五日、夜の明けを待つて麻布今井の実家引き取られて行った。

鉄砲洲上屋敷は即時引渡しを命じられて、三月十五日、十六日の二日間で、家財類の引越をすべて終え、十七日には普請奉行に引渡された。

江戸勤番の家士たちは三々五々、急ぎ国許へ帰って行った。そこには去年（元禄十三年五月）主君の参勤交代のお供で江戸入りしたときの大名行列のあの華やかさはなかったはずだ。

帰るに帰る家もない江戸定府の家士たちは江戸の町の親類を頼りにそれぞれ散っていったことであろう。

かくして主を失った江戸赤穂村（鉄砲洲上屋敷、約九千坪）は何百人が住んでいたのか、わずかこの三日で完全に崩壊した。

さて早駕籠の赤穂到着は第一便が五日後の四月十九日明け方、第二便が午後の七時頃、そして第三便は午後十一時頃であった。

立て続けに届く早打ちに赤穂城は正に青天の霹靂となり、連日家臣総登城による城中人会議が開かれた。

四月十九日の城地引渡しに向けて籠城、殉死、開城と激論が交わされた。この間には城代家老大野九郎兵衛の赤穂離散、江戸急進派らの上落による意見具申等厳しい場面もあったが、最後には大石内蔵助の「以後の含みもある」との裁量によって無事開城となった。

開城の際には内蔵助から御目付衆に、大学が人前になるようにとの三度にもわたる「嘆願」まで飛び出した。結果として城内、城地の行き届いた清掃、対応に対し、御目付たちには好評であった。

内蔵助は四月十九日の城地引き渡し後は事務所を遠林寺に移して残務整理に当たった。それが終わったのは五月二十一日であった。

二十四日、百ヶ日の法要を済ませ、六月二十五日にはいよいよ尾崎村おせどの寓居を引き上げることになった。

翌日、伊和都比売神社で内匠頭に別れを告げ、八畳岩砂浜から海路大坂へ向かった。内蔵助が四十余年、生まれ、育ったこの地、赤穂。内蔵助は二度とこの地を踏むことはなかった。

大坂では先発した家族と合流し、天満宮の祭を参観して、さらなる寓居、京山科西野山へ着いたのは六月二十八日であった。

内蔵助が山科へ移つてからは、上野介の早期復讐を狙う堀部安兵衛らいわゆる江戸急進派からは江戸の状況更には内蔵助の東下を促す手紙が盛んに寄せられるようになってきた。

そこで九月下旬になって原惣右衛門らを東下させ、さらに十月に内蔵助自ら江戸入りして急進派の鎮撫に当たった。

ところが内蔵助が帰洛して間もなく十二月十一日、幕府はかねてから願い出されていた上野介の隠居と養子左兵衛義周の相続を認めるという裁決を出した。

さらに今度は半年後の七月十八日幕府は閉門中の浅野大学を評定所に呼び出し、「閉門を許し、浅野宗家へ差し置く」という判決をくだした。

これによって内蔵助がかねてから叫んできた二つの願い、①喧嘩両成敗による上野介の処分及び②浅野大学による浅野家再興の望みは消え去ってしまったのである。遂に内蔵助が起ちあがるときがきた。

元禄十五年七月二十八日、内蔵助は京円山の安養寺塔頭重阿弥に上方の同志を呼んで会議を開いた。集まった同志は十九名。世に言う円山会議である。まず内蔵助はいままでの自分の躊躇を詫ひ、上野介への復讐を誓い、江戸集結を宣言した。

その時、その義士たちはどこにいたのか。左記のように江戸にいた義士は十九名、上方にいた義士二十八名であった。

これを機に上方義士達の三々五々東下りが始まった。

江戸時代の旅は専ら徒（かち）であった。

江戸↓京都がおよそ一三〇里、江戸↓赤穂がおよそ一七〇里といわれている。

一日一〇里（かなりの健脚）を歩くとして半月はかかる長旅であった。

初めての長旅という若者もいたであろう。親兄弟、妻子との別れを惜しんでの二度と帰らぬ旅。

義士たちはどんな思いで箱根の山を越えたのだろうか。

富士の根を見つっこゆれば花にあくる

箱根の山に残る白雪

神崎与五郎

一、江戸にいた義士 十九名

①元江戸詰め（定府、勤番）十四名

片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、堀部弥兵衛

富森助右衛門、堀部安兵衛（円山会議に参加）、

赤埴源藏、奥田孫太夫、矢田五郎右衛門、倉橋

伝助、村松喜兵衛、杉野十平次、前原伊助、奥田

貞右衛門、村松三太夫

②刃傷事件後江戸へ入った者など五名

勝田新左衛門、吉田忠左衛門、寺坂吉右衛門、

神崎与五郎、間新六

①横川勘平（元十五、七、二十四京都発）

②岡野金右衛門、③武林唯七（閩人、二十五江戸着）

④吉田沢右衛門、⑤間瀬孫九郎、⑥不破敦右衛門

（九、二江戸着）

⑦千馬三郎兵衛、⑧間十次郎、⑨矢頭右衛門七

（九、七江戸着）

⑩木村岡右衛門（九、二十江戸着）

⑪大高源五（十、十八江戸着）

⑫大石主税、⑬間瀬久太夫、⑭大石瀬左衛門、⑮小

野寺幸右衛門、⑯茅野和助（九、二十四江戸着）

⑰原惣右衛門⑱岡島八右衛門、⑲貝賀弥左衛門、

⑳間喜兵衛（十、十七江戸着）

㉑小野寺十内（十、十九江戸着）

㉒中村勘助（十月江戸着）

㉓大石内蔵助、㉔潮田又之丞、㉕菅谷半之丞、㉖早

水藤左衛門、㉗近松勘六、㉘三村次郎左衛門

（十、七京都発↓十、二十一鎌倉↓十、二十六

平間村↓十一、五小山屋着）

参考文献

①新大石内蔵助の生涯 中島康夫

②元禄快挙真相録 福本日南

③正史 赤穂義士 渡辺世祐 井筒調策

④赤穂義士実纂 斎藤茂

二、上方（京都、大坂等）にいた義士 二十八名

第二十二回忠臣蔵愛好会報告

引き揚げコースを歩く

平成三十年一月二十八日に、恒例の、吉良邸跡から泉岳寺までの赤穂義士引揚げコースを歩く会が行われました。当日は好天に恵まれたこともあって、五十二名の方々が参加されました。偶然にも説明員五名を除くと赤穂義士の数と同じ、四十七名になりました。

JR両国駅に九時十五分に集合、挨拶と注意事項の説明の後、九時半に四つのグループに別れて吉良邸へ。吉良邸跡からいよいよ引き揚げコースに出発。各グループの先導ならびに説明は、富岡、上原、金子、坂藤の四名が担当しました。また、旧細川邸切腹地の説明は荻原が行いました。

コースのおおよそは次の通り。

両国橋―万年橋―永代橋―越前堀児童公園―聖路加タワー（ここで昼食）―浅野家上屋敷跡―築地本願寺―汐留橋―旧新橋停車場跡―日本テレビ前―金杉橋―御田八幡宮―泉岳寺―細川家下屋敷跡。
全行程約十二キロメートルです。

吉良邸跡から両国橋へ、それから隅田川の東岸を歩き、永代橋を渡って、築地へ向かいました。聖路加タワー周辺で昼食を取った後、屋敷前で赤穂義士が涙を流したであろう浅野家上屋敷跡から、築地本願寺にある間新六の墓に詣で、汐留シオサイトの旧新橋停車場前、日本テレビ前(仙台藩邸跡)を通り、

浜松町の手前で、旧東海道（現国道十五号線）に出ます。その後、一路泉岳寺を目指して進みます。途中金杉橋で休憩し、全員無事に泉岳寺に到着。浅野内匠頭と赤穂義士の墓に詣でた後、通常は入れない細川家下屋敷跡の、大石内蔵助ら十七名の切腹地を見学しました。ここは、切腹位置が特定できている唯一の場所で、昭和三十三年に中央義士会が整備し、現在は東京都史蹟に指定されています。

両国を九時半に出発し、途中途中で史蹟の説明やトイレ休憩を取り、昼食をばさんで泉岳寺には午後三時半に到着しました。都内は休日とあって、交通量も少なく予定通りの時間で歩ききることができました。（文・写真 荻原）



完歩しました
泉岳寺にて 1班



泉岳寺にて 3班



泉岳寺にて 2班



細川邸下屋敷跡 切腹地にて



泉岳寺にて 4班

浅野内匠頭三一八回忌報告

平成三十年三月十一日(日)に、浅野内匠頭三一八回忌の法要を、泉岳寺において催しました。

例年三月十四日が平日の場合、直前の日曜日に開催してきましたので、今年は十一日になりました。

三十名の方々の参加がありました。

午後二時から泉岳寺本堂において、浅野内匠頭の法要が行われ、御子孫の手によって、卒塔婆が墓に添えられました。その後本堂横の庫裏において、例会が行われました。まずは、中島代表の「さらに詳しく松之廊下事件」と題した講演で、松之廊下事件について史料に基づいた話があった後、懇親会に入りました。

懇親会の最初は、御子孫や遠方から来られた方々の紹介が行われました。続いてお楽しみ抽選会で豪華賞品などが当たり、今年も盛会裡に幕を閉じました。

なお、今回は、希望者を募り、泉岳寺庭に法要の前の十二時に集まっていただき、大石内蔵助らの切腹地(旧細川邸)へ向かいました。いつもは施錠されている切腹地の開場を行い、中島代表の説明で見学会を行いました。

(文・写真 荻原)



平成 30 年 3 月 11 日 泉岳寺
講演の様様



平成 30 年 3 月 11 日 泉岳寺
本堂での法要

特別企画 「吉良上野介のお墓参り」

中央義士会会員 佐々木 衛

平成三十年四月二十九日、JR中央線東中野駅で午後二時に集合した忠臣蔵愛好会主催の「吉良上野介のお墓参り」巡拝が、中島康夫理事長以下、二十五名が参加して実施されました。

この日は朝から気温が上昇して、参加者の体調が心配されましたが、それぞれ熱中症に備えられて、和気あいあいの雰囲気でした。

出発に先立ちまして、中島理事長よりの挨拶と、本日巡回するコースや、注意すべき点についての説明がありました。



東中野駅前にて

その後予定より少し遅れて東中野駅を出発し、最初の訪問先である萬昌院功運寺の山門を潜りました。このお寺には、浅野長矩の宿敵、吉良上野介（戒名・靈性寺院殿前上州別賀従四位上羽林次将実山相公大居士）のお墓がありますが、さわめて貴重な訪問でしたが、今回、此処までに至ったのは中島理事長が幾度もお寺側と折衝された結果です。

早速ご住職から参加者全員に、寺歴や著名な方々の墓所を記したパンフレットを頂戴致しました。ご住職の案内で吉良さんが眠られる墓所に付いてご説明を頂きましたが、その墓石は多くの人々の恨みを買ってか、無残にも傷付けられて、倒されたりしたそうです。思えば何ともそこまでしなくとも思いました。



万昌院功運寺 吉良上野介墓前にて
ご住職の説明

更に、松之廊下において刃傷を受けた吉良上野介の治療に当たった南蛮医の栗崎道有（戒名・瑞靈院殿瘻暢岳正羽居士）や、四代將軍家綱の御法会（芝増上寺）の席で、長矩の叔父内藤忠勝によって斬殺された永井尚長の墓所や、吉良家の主筋である今川家の墓所があり、赤穂事件の側面を知るには貴重な体験でした。



暑さには負けません 次のお寺に移動中

益々暑さが強くなる中、次は天徳院を尋ねました。このお寺には松之廊下で浅野長矩の刃傷を阻止した御台付の梶川與惣兵衛（戒名 謙享院殿閉雲古水大居士）の墓所がありました。

中島理事長より梶川が刃傷を阻止した際の状況や、その後の梶川の子孫に付いての説明があり、改めて世の移ろいの無常を実感致しました。次は松源寺です。このお寺には大垣城主（十方石）であった戸田氏西の



新井白石の墓前にて

妻、多阿（貞涼院）のお墓などがあります。多阿の出
 自は、志摩鳥羽の城主、内藤忠政の娘ですが、その妹
 であった波知は、赤穂城主の浅野長友へ嫁し、生まれ
 た子が浅野長矩です。中島理事長のお話によると、波
 知のお墓は小石川の無量院にあったようですが、残念
 ながら現在は、行方が判らないとの事でした。
 本日の巡拝コースも後半に入り、次に訪問したのは、
 新井白石の墓所がある高徳寺（真宗大谷派）です。白
 石は自叙伝「折りたく柴の記」を著したことで知られ
 ていますが、著書の題名の由来は、後鳥羽院の御製で
 「思ひいづる折りたく柴の夕けぶりむせぶもわすれが
 たみに」から採ったと言われております。
 白石は木下順庵の門弟で、木門十哲と賞賛される中
 で、一番優秀な人物でしたが、十哲には他に、白石の
 推挙によって八代將軍吉宗の儒官となつた室鳩巢など
 がいます。

白石の墓は意外なほどに小さく石垣の柵の中にあり
 地味でしたが、中島理事長によれば、当時の学者は、
 大名の元で庇護を受けて弁により生活の糧を得る身故
 に、常に質素を宗としていたようです。

白石は六代將軍家宣の下で儒官として仕え、幕政に
 も大きく関わつた人物ですが、現代の学者諸氏に比較
 したならば、極めて高潔な生き様でした。次に五代將
 軍綱吉の御側用人であつた柳沢吉保の側室、染子の墓
 所がある龍興寺を訪ねました。染子は最初綱吉の側室
 でしたが、後に何故か、柳沢吉保に染子を下賜され
 が、今の女性から見れば、何とも理不尽な扱いに見え
 るかも知れません。さて染子は柳沢の元へ嫁した後に
 吉里を産むのですが、この子が綱吉の子であつたとの
 風聞があり、綱吉は吉里を六代將軍にする事を遺言と
 して残した為に、幕閣内では極めておおきな問題とな
 り、このことが俗に「柳沢騒動」と呼ばれる事件を招
 きます。

最後に一行は脇坂家の墓所がある清原寺を訪ねまし
 た。脇坂淡路守安照は赤穂領の隣、播州竜野の城主で
 すが、浅野家改易の際に、幕府から赤穂城収使として
 任命された人物です。

今回の「吉良上野介のお墓参り」も無事終了しまし
 たが、最後に中島理事長からの挨拶があり、その中で
 上杉綱勝が吉良上野介の手によって毒殺された由の説
 明がありました。その衝撃的な内容は、上杉家の家臣
 であつた大河原忠左衛門の嫁婿であつた大熊弥一右衛
 門が書き残した文書で証明されると言います。この文
 書の中島理事長ご自身も確認されたとの事であり、吉
 良上野介の素性を知る上で極めて重大な証明となるも
 のです。それが、巻頭文に載せたとうりです。

参加者全員熱い日差しにも負けず、午後四時半過ぎ
 に本日の巡拝は無事に終了致しました。 合掌



全員集合 高徳寺にて

(写真 武類、坂藤)

第6回忠臣蔵通3級検定試験問題

[申込方法]

・ 解答用紙の請求

検定試験の受験をご希望の方は、住所、氏名、電話番号、FAX番号並びに、第6回3級検定試験申込と記入した用紙を、下記宛てFAXまたは郵送でお送り下さい。FAXをお持ちの方は、できるだけFAXでお願い致します。また、メールでも受け付けております。折り返し解答用紙をお送り致します。

宛先 〒135-0047 東京都江東区富岡1-17-1-403

NPO法人 忠臣蔵倶楽部

TEL/FAX 03-3630-1927

メール office@chuushingura.jp

・ 受験料と振込先

3級の受験料は1000円です。振り込みで受験申込となります。

郵便局の青色の払込取扱票で下記へお振り込みください。

NPO法人 忠臣蔵倶楽部 00190-0-346038

払込取扱票の通信欄に「第6回3級試験申し込み」と記入下さい。

払込料金をご負担をお願いしております。

[解答の送付]

解答はFAXで下記へお送りください。郵送の場合は、下記の中央義士会事務局へお送りください。メールでは受け付けておりませんのでご注意ください。

FAX 048-973-3790

郵送宛先 〒343-0032 埼玉県越谷市袋山 58-12 中央義士会事務局

- ・ 提出締め切りは平成30年10月末です。合否は11月になってからお知らせ致します。

[注意事項]

- ・ 合格点は80点です。24問以上正解で合格となります。
- ・ ご自宅で資料を調べて解答していただいて結構です。
- ・ 試験問題を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- ・ 同じく、会員、受験者同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げるのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- ・ 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題も出題されています。
- ・ 中央義士会の過去の出版物でも誤記がありますので充分確認の上、解答して下さい。
- ・ 受験料は締め切りの1ヶ月前までにお納め下さい。
- ・ 最終提出日は、平成30年10月末日です。

忠臣蔵110番

080-8908-1633

○講演・探訪会の講師派遣（有料）

○テレビ・ラジオ番組制作協力（有料）

○忠臣蔵書籍出版

○忠臣蔵図書の買い取り・販売 等

メール chuogishikai@tokyo.email.ne.jp

平成30年6月

第1問	赤穂浪士の討入りに備え、いわゆる吉良邸の「付人」といわれる武士は、上杉家より何人派遣されたのでしょうか。 ① 0人 ② 5人程度 ③ 10人程度 ④ 15人程
第2問	吉良家の清水一学は、討入りに際して、吉良邸のどこで絶命したのでしょうか。 ①庭の橋の上で堀部安兵衛に切られた。 ②納戸（炭も入っている）で、吉良上野介が倒れる前に切られた。 ③吉良上野介の寝室で切られた。
第3問	討入りが終わって、今井の瑤泉院に「討入り成功の報」を知らせた人物は、次のどなたでしょうか。 ① 甚三郎 ② 寺坂吉右衛門 ③ 大石三平 ④ 佐藤條右衛門
第4問	討入りで、吉良上野介を仕留めたのは「間十次郎」ですが、十次郎の槍は上野介の身体のどこに刺さったのでしょうか。 ① 足 ② 腹 ③ 胸 ④ 顔
第5問	討入りに際して、吉良邸周りの町家（相生二丁目）の人は、どんな様子だったのでしょうか。 ① 喜んでいた ② 笑っていた ③ 悲しんでいた ④ 知らぬふりをしていた
第6問	討入りの最後に「勝ちどき」を挙げますが、最初に声を上げた義士はどなたでしょうか。 ① 勝田新左衛門 ② 大石内蔵助 ③ 原惣右衛門 ④ 堀部安兵衛
第7問	「江赤見聞記」はどなたが書き残したと思われますか。 ① 大石三平 ② 寺坂吉右衛門 ③ 落合与左衛門 ④ 唐崎局
第8問	「易水連袂録」はどなたが書いたと思われますか。 ① 落合与左衛門 ② 天野弥五右衛門 ③ 大久保彦左衛門 ④ 大石三平
第9問	「吉田忠左衛門」「富森助右衛門」が、義士たちを代表して「仙石邸」に自訴した朝、仙石家では彼等を特別の扱いをしました。次のどれでしょうか。 ① お風呂に入れた ② 着替えさせた ② 足を洗うのにお湯を出した ④ 布団を敷いて休ませた
第10問	NHK「忠臣蔵の恋」のドラマ中、細井広沢が立派な服装で登場しておりましたが、それを見てあなたはどう思いましたか。

第11問	歴史書として書いた一般の出版本や参考書の参考資料に、小説をのせてある本がありますが、どのように思いますか。
第12問	赤穂義士の身内で、亡くなられた場所に現在その方のお墓がある方がおります。どなたでしょうか。
第13問	赤穂義士は引揚げの際、最初に「駕籠」に乗った場所はどこでしょうか。
第14問	引揚げの際、「両国橋東詰め」で小休止しますが、そこはある物の置き場でした。次の内どれでしょうか。 ① 流木 ② 材木 ③ 石 ④ 砂
第15問	梶川与惣兵衛の詰め所（江戸城内での）は下記の内どこでしょうか。 ① 御広敷 ② 殿上の間 ③ 大奥対面所 ④ 大広間
第16問	梶川与惣兵衛はどなたのお使いで吉良上野介を探していたのでしょうか。 ① 御台 ② 御台所 ③ 老中 ④ 高家
第17問	元禄事件のあった頃の泉岳寺の住所はどこでしょうか。（史料で一番多い町名を1つ挙げて下さい） ① 高輪 ② 芝 ③ 車町 ④ 牛町
第18問	松之廊下事件で、浅野内匠頭は吉良上野介に対して殺意があったか、なかったか、どちらでしょうか。 ① 殺意はあった ② 殺意はなかった
第19問	梶川与惣兵衛が江戸城の勤めに上がるまで、いわゆる元禄9年まで勤めていた役職は何でしょうか。 ① 北町奉行 ② 本所奉行 ③ 代官 ④ 南町奉行
第20問	浅野内匠頭の公儀介錯人磯田武太夫は、3月14日にある失敗をしました。何でしょうか。 ① 介錯を仕損じた ② 違う人の首をはねてしまった ③ 刀が折れてしまった ④ 同僚を切ってしまった
第21問	泉岳寺の「義士墓」には墓石が48基ありますが、実際の御遺体は何体入っているでしょうか。 ① 45体 ② 46体 ③ 47体 ④ 48体

第22問	討入りが終って、刀が「さや」に入らなかった義士は何人いたでしょうか。 ① 2人 ② 3人 ③ 4人 ④ 0人
第23問	「寺坂吉右衛門は11月の時点では討入りに加わるはずではなかった」以上の文章は正しいでしょうか、誤りでしょうか。 ① 作り話 ② 小説上の事 ③ 研究不足 ④ 正しい
第24問	「今瀬孫右衛門」とは、どなたの偽名でしょうか。 ① 寺坂吉右衛門 ② 瀬尾孫左衛門 ③ 毛利小平太 ④ 中田利平次
第25問	「水野定吉」とは、どなたの御子孫でしょうか。 ① 鎌田軍之進 ② 倉橋伝介 ③ 堀内伝右衛門 ④ 並木宗輔
第26問	「大高源五一族9人が討入った」と書いてある手紙はどなたが書いたのでしょうか。 ① 貞柳尼 ② 仙桂尼 ③ 妙海尼 ④ 貞立尼
第27問	大高源五の「陶印」を保存している団体はどこでしょうか。 ① 東京大学 ② 大石神社 ③ 小島資料館 ④ 永青文庫
第28問	「鍋蓋」（なべぶた）の伝説のある義士はどなたでしょうか。 ① 片岡源五右衛門 ② 礒貝十郎左衛門 ③ 寺坂吉右衛門 ④ 大高源五
第29問	討入りが終わった時、47人の点呼を「堀部安兵衛」が取ったと記されている史料を挙げて下さい。
第30問	現在の旧細川邸（高松中学内）は、中央義士会によって昭和35年に整備されていますが、総合建築費はどの位掛かっているのでしょうか。 ① 1000万円 ② 500万円 ③ 300万円 ④ 100万円

年譜忠臣蔵 只今校正中！

江戸時代初期から現代にかけて、忠臣蔵に関する全ての出来事を一冊にまとめた本です。年表の形式ですので、忠臣蔵の歴史を知るには最適かつ、これまで作られたことのない本です。皆様の座右の一冊として是非お手許に置いて下さい。

A4版 100ページ 500部限定（予定） 定価 1,500円（予定）

平成30年12月14日刊行

お申し込み問い合わせは右記へ

FAX 048-973-3790 TEL 048-973-3777

日蓮宗

法耀山 高光寺

赤穂市加里屋一八六一

NPO法人忠臣蔵倶楽部

理事 富岡 克

東京都中央区在住

NPO法人忠臣蔵倶楽部

役員 丸山裕之

川崎市川崎区在住

NPO法人忠臣蔵倶楽部

理事 三輪三郎

川崎市麻生区在住

NPO法人忠臣蔵倶楽部

代表代行 荻原 栄

この法人のホームページは <http://www.chushingura.net/> です

NPO法人忠臣蔵倶楽部

会員 露木和代

千葉県八千代市在住

中央義士会にお十年間在籍して居ります

大内満利子

仙石伯耆守系

元中央義士会事務局長著

「赤穂義士実纂」

齊藤茂

定価一六〇〇円を一三〇〇〇円で販売
先ずお電話を〇八〇―八九〇八―一六三三

編集後記

世に汗牛充棟といわれるほど、吉良上野介が「悪人」である一級史料が存在するのには、それらの史料には一切ふれず、反論もせず唯々「名君」を叫び続ける方々よ、「町の人がいつている」で証明になるかなあ。それも近年の何も知らない町の人がいわされているにすぎないのである。では、どうして討入り当夜、落命した吉良家臣齊藤清左衛門の墓石の戒名が削り取られているのか。この町民の行為こそが、旧幕吉良町の民の本音ではないのか。我々は、ムキになって上野介を悪人呼ばわりをしているのではない。上杉鷹山のような業績や証拠を一日も早く見たいのである。近年の作り話である黄金堤・塩田・赤馬・七面山の外に証明してほしい。反面、浅野内匠頭の戒名の意味が「正義の剣」(吹毛玄利)であることを知っておいでか。「碧巖録」の百則をお読みいただければ、その謎が氷解すると思う。要するに、三百年前内匠頭の戒名が決まった時点で、赤穂事件は「真の勸善懲悪劇」が始まったのである。

編集者

中島康夫(企画・編集・検証)
荻原 栄(編集)、三輪三郎 校
正)、金子明(校正)
エム・シヨット(印刷)